（別紙）

令和６年６月定例会議　一般質問【平日議会】

11 番議員　　前田　せつよ

子宮頸がんは「ワクチン接種」と「検診」で万全な予防対策を

子宮頸がんはヒトパピローマウイルス（ＨＰＶ）が原因のがんであり、日本では 20 歳～40 歳女性におけるがん死亡の第２位である。世界保健機関（ＷＨＯ）は、制圧可能ながんと捉え「ワクチン接種」と「検診」が対策の両輪としている。

① 子宮頸がん予防のＨＰＶワクチンは、小学６年生～高校１年生相当を対象に公費助成で定期接種を無料で受けることができる。
国は、平成 25 年から 9 年間接種勧奨を差し控えていたことから、その期間、接種率が大幅に下がったため、接種機会を逃した方を対象に実施している「キャッチアップ接種」も合わせて推進している。その対象年齢は 27 歳までだが、国からの公費助成は令和７年 3 月 31 日までが期限である。
接種の推進が重要と考え現状と今後の対策を問う。

② 子宮頸がん検診については、国は 20 歳～69 歳を対象に２年に１回「細胞診」の定期受診を推奨している。
新たな取り組みとして、今年度から自治体の判断で導入可能となった「ＨＰＶ検査」がある。30 歳以上を対象に細胞を遺伝子レベルで調べる検診方法であり、頻度は５年に１回となるため受診者等の負担も軽減される有効な検査である。
検診の拡充となるＨＰＶ検査を導入する考えは。